

1. 寺院側の寛容精神

(1) 四国霊場

徒歩スルーハイクによる四国遍路を4回行っているが、四国八十八か寺霊場の殆どにおいて、同寺院を守護する神社（鎮守社）が今も併設されていた。図-3～図-6はその中の一例である。



図-3



[42 番仏木寺]

図-4



図-5



41 番龍光寺の正門



87 番長尾寺の大師堂



80 番国分寺の本堂

図-6

※；参拝する前に「鰐口」あるいは「鈴」を鳴らします、「鰐口」は概ね“お寺”、「鈴」は概ね“神社”の拝殿に下げられているが、ここでは寺に鈴も下げられていた。

(2) 真言宗高野山金剛峯寺の姿勢～真言の太っ腹

以下はもちろん、真言宗総本山の金剛峯寺管理下にあります。

a. 壇上加藍／(図-7)

真言密教仏教施設の中枢部――二大聖地の一つ壇上加藍域に神道神社が堂々と並立している！

図-8aは奥にある御社――弘法大師が高野山を開いた際に守り神として丹生明神・高野明神を勧請した社――、図-8bはその手前にある山王院（御社の拝殿）がある。この神社は金堂からわずか70mの所で、仏教施設と仕切る垣根などは何もない。



図-7



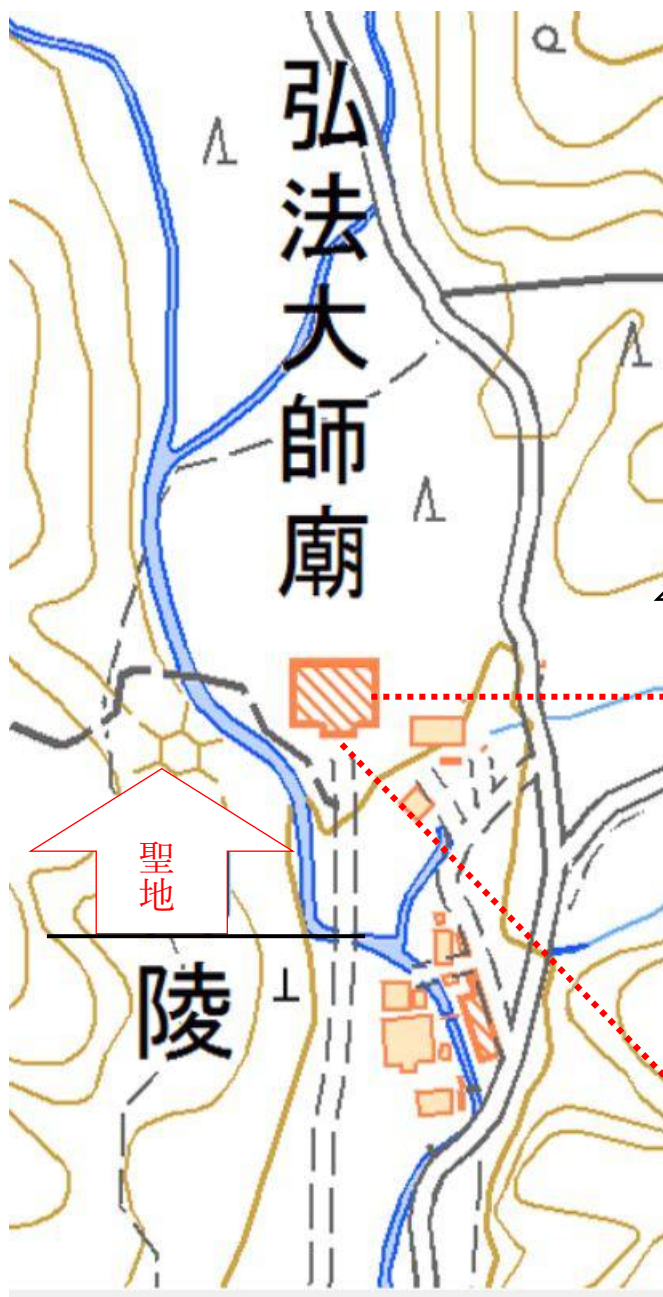
図-8a



図-8b

b. 奥の院／(図-9～図-10)

二つ目の聖地、弘法大師空海が眠る御廟は当然仏教施設で、神が守護している。



弘法大師御廟（聖地＝秘所）

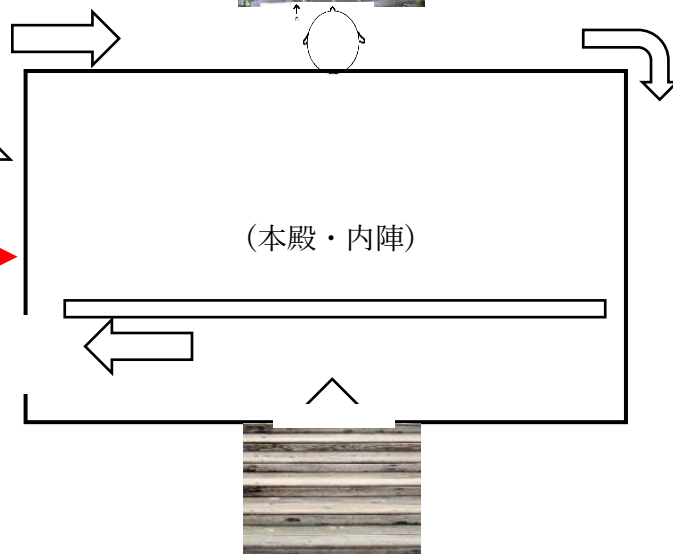



図-9

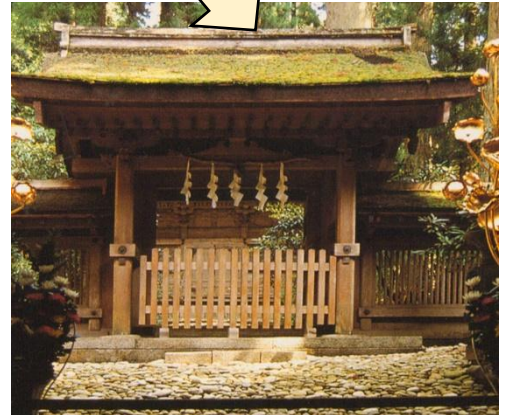
明らかに「しめ縄と紙垂(しで)、それに切り紙（オカザリ）の宝来（縁起物）^{ほうらい}」と思われ、神道の香りがする。ご承知のとおり、しめ縄と紙垂、オカザリは、俗界と神界の境界・結界を目に見える形にしたものである。

弘法大師を神様が見守り、仏道の僧侶が日々のお世話をしているのである。なんとも素晴らしいことか。次頁図-10④は御廟本殿（本堂）内部で、正面透けている処の先には、外部に⑤御廟本体

がある。いずれも、本来は撮影禁であるが・・・（こっそり撮影で ）。



Ⓑ



Ⓐ

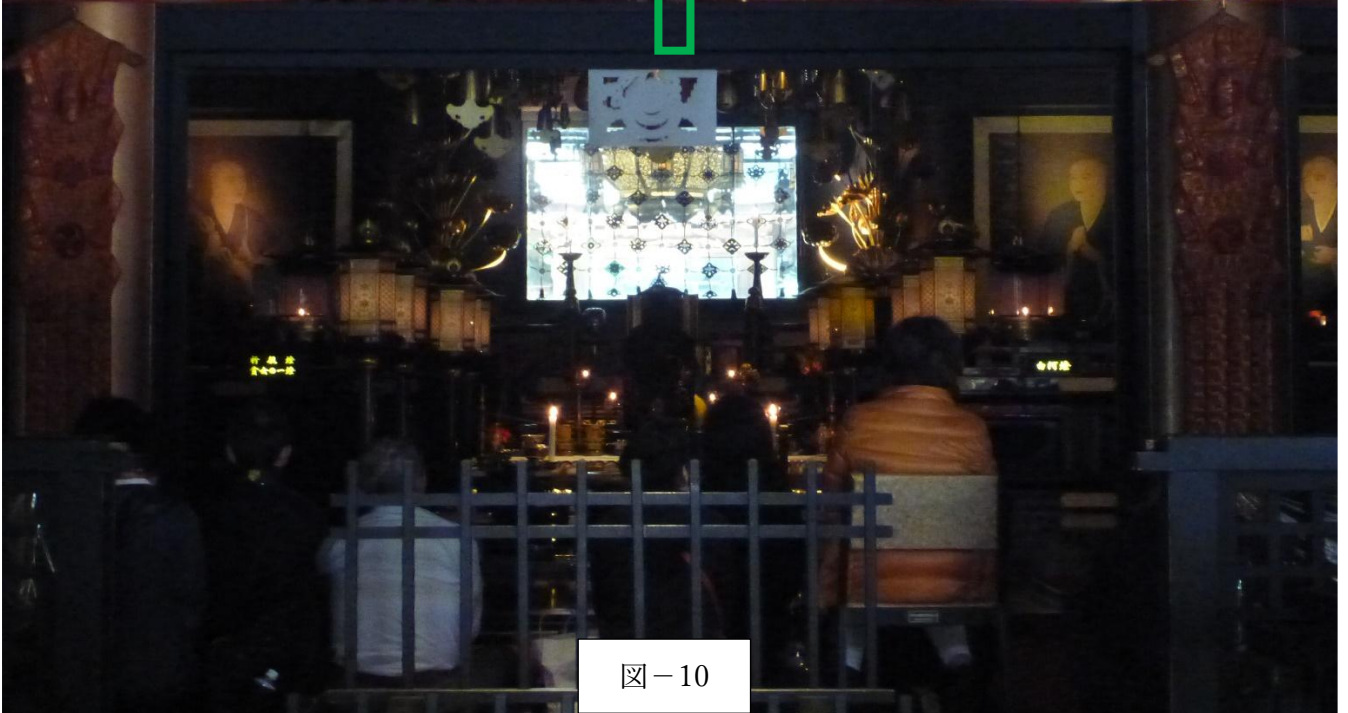


図-10

(3) 天台宗比叡山延暦寺の姿勢～天台の太っ腹

その1；同寺は、東の「東塔」、西の「西塔」、北の「横川」の三地区で構成されているが、私はこの三地区に3回行った。

図-11は、日本仏教の母山と言われる延暦寺の根本中堂の門を潜ると右前方にある石組みの囲いの基壇（茗荷と竹を植えている。）である。掃除をしている僧侶に何の目的なのか、と尋ねた処「神様をお招きする儀式の時に使うもの」と、はっきりと話された。この門を潜ると同寺に取っては最も重要な仏の空間・聖地であろうが、そこで何らかの神事を行うという。天台宗護法神たる日吉大社の神様憑代としての祭壇を作るのではないかと推定している。



図-11

その2；図-12は同寺の関連機関としての叡山学院学外研修の一つです。同院のインターネットホームページには、――最澄の国宝的人材育成理念である「一隅を照らす」「能く行い能く言う」「己を忘れて他を利する」の精神を基盤として天台宗僧侶を養成、と記載されている。まさに、天台僧侶の養成所である、そこが、研修において、他宗派のそれもライバルと目される高野山に学び、さらには、一面对極にあると思える神道

界神社本庁配下の熊野三山大社、伊勢神宮までも研修の対象としているのだ。これから天台宗を背負って行く未開・未発の若い人達の学びの場です。広い視野を持って貫うための研修だろう。素晴らしい事だと思う。世間で能くあるのが「純粋な若者に余計な事を教えるな！」でふるが、さすが天台の総本山のやる事は立派である。

図-12

「比叡山時報」より

2014(平成26)年11月8日(土)
第717号

学外研修で信仰の道を辿る

高野山や熊野三山を参拝

叡山学院

叡山学院(大津市坂本・清原恵光院長)では、10月7日から3泊4日の日程で学外研修旅行を行った。訪問先は来年開創1200年を迎える真言宗総本山高野山を始め、紀伊半島に広がる神社仏閣で、古来より受け継がれた信仰の道を通りながら各社寺を参拝した。

高野山においては学院生の表敬訪問に対して、小敷実英真言宗教学部長を始め、宗務内局より案内を賜った。また、翌朝の朝勤行に

3日目には熊野古道を歩き、熊野本宮大社、熊野速玉(新宮)大社、熊野那智大社を参詣。

その後、西国三十三所霊場の一番札所である那智山青岸渡寺(近畿・高木亮享住職)を参拝し、補陀洛山寺では高木亮英副住職よりご法話を賜った。

最終日には本年式年遷宮を迎えた伊勢神宮を参詣し、厳かな雰囲気の中、参加者一同が日頃の感謝を陳べた。

高野山での記念写真

その3；図-13の例は、天皇に係る行事である、延暦寺トップが大導師となつての法要儀式である、さらには平安神宮トップも参列している。まさに、神仏同座の現状である。「比叡山時報」を読む機会があるが、とにかく神仏習合の内容に触れる事が多々ある。

平安神宮での法要



桓武帝のご遺徳に感謝を捧ぐ
山上山下で報恩法要を厳修
叡山時報
2010 (H27) 0608 (月)

山上では、5月17日大講堂において延暦寺長脇中山玄晋大僧正を導師に伝統の「桓武天皇講」が声明例時を以って執り行われ、出仕僧侶が唱える声明が約1時間半にわたり堂内に響いた。内陣に奉安された桓武天皇ご尊像には、表千家流と京都河道屋よりお茶と蕎麦がそれぞれ献ぜられ、僧侶らは御座に平伏して礼儀を尽くした。写真右。また5月21日には、

桓武天皇を主祭神に祀りする京都市左京区の平安神宮本殿にて、延暦寺一山住職により報恩法要が法華三昧を以って厳修され、天台座主猊下御名代として森川宏映探題大僧正が大導師を勤められた。

法要には九条道弘宮司を始め神官方が参列。本殿へと続く回廊を神職と僧侶が行列する様子を見て、参詣に訪れた人々は、初めて目にした神仏習合の姿に少々驚きながらも、手を合わせ祈りを捧げていた。



図-13

その4；前記その2・その3に鑑みて、逆に神職が研修において寺院に詣でる、あるいは、神職が主体となって両者同列の大行事を行う——神道神社が寺院の住職を招待して祭儀を執り行う事例を知りたく思っている。

(4) 奈良東大寺の二月堂の「修二会」

これは一般には「お水取り」の名で知られており、今に神仏習合を色濃く残す行事である。極々簡単に言うと、東大寺の僧が本尊の十一面観音、いわば仏様にお詫びをする行であり、これを「悔過」という。その「悔過」は神様の前で行う、そのために全国の仏法守護神 449 項 522 個所（約 13,700 柱）ほどの天神地祇を記載した「神名帳」を読んで法会への招待をする、その時拍手を打つ、それも 2 週間に亘って毎晩読む、そして「お水取り」の行に入る時は、境内にあって行法を守護する三神社（興成神社・飯道神社・遠敷神社）にお参りする。

逆に隣の（昔は一体）手向山八幡宮の宮司が、僧侶（練行衆）の坊入りや参籠宿所入りに先立って、台所・仏餉屋、浴室・湯屋の竈等行場の清祓を行い、火のまわりを清め、要所の厳重な結界に掛ける注連縄に挿す幣を作る。等々当に神仏習合の色彩が極めて濃いのである。図-14a は二月堂周辺を切り取ったものである、同堂を囲むように前出三つの神社、右側には有名な「手向山八幡宮」――天平勝宝元（749）年東大寺大仏建立のため、九州豊前国（大分県）宇佐八幡宮より東大寺守護の神として迎えられたもの。――が隣接している。図-14b はメイン舞台の二月堂である。



図-14a



図-14b

「お水取り」には「お水送り」が対になっている。この「お水送り」行事は、毎年 3 月 2 日に若狭神宮寺で行われる、その 10 日後、毎年 3 月 12 日に奈良東大寺二月堂でその「お水取り」が行われる。つまり、送った『お香水』は約 90km の距離を 10 日間掛けて東大寺に届くということである。位置関係は図-15 のとおりでほぼ南北の関係にある。

私は、「西国三十三所観音霊場順礼」――2019(H31~R 元)年、正月 4 月 2 日（火）～5 月 7 日（火）35 連泊 36 日間（歩行距離 1,071 km）――中、二月堂には 13 日目 4 月 14 日(日)に、同神宮寺には前記同年 30 日目の 5 月 1 日(水)に立ち寄った。

修二会（お水取り）については、NHK-BS 放送で見えており、また、書籍を購入して概要は理解しているが、私に残された課題は、その二つの神事を直接拝観することである。

(5) その他



図-15

東大寺のみならず、奈良においては、法隆寺やかんごうじ元興寺においても神仏習合の色濃い行事を行っているとのことである。

さらに、「出雲國社寺縁座の会」は、島根・鳥取両県の20の神社・仏閣が神（祭神）・仏（本尊）の違いや宗派を超えて、有名な出雲大社が中心的な役割を担い2004(平成16)年12月7日(火)に結成・設立し、上記同様神仏同座の活動を展開しているという。

2. 神社側の寛容精神

(1) 椿大神社つばきおおかみやしろ

伊勢の国一の宮椿大神社（祭神は猿田彦大神・あめのうずめ天鈿女命／三重県鈴鹿市山本町）の事例である。当時の宮司山本行隆氏著書「椿大神社二千年史（たま出版）」の中から要約する。

「・・・奈良・平安の神仏混淆時代、同社境内には神宮寺といわれる別当寺六か寺が併設されていた。天正の

頃、織田の兵火で神社と寺は悉く焼かれ400人もの社僧が焼死した。」（このような歴史を憂いていた同山本宮司は、昭和の大造営の中で次のようなことを成し遂げました。まずは、次のようなことをお話されています。）

・・・私は神道、仏教といった狭い枠に閉じこもらないで、焼死した4百人以上の僧の霊を慰めなければならないと考えた。神社に仏を祀るお堂を造ると言うのは奇妙に聞こえるが、生前仏教僧として活躍した人には仏教に基づく祭り方をしなければならない。・・・

- その別当寺跡地にそれらの無縁仏供養のために多宝塔を建立し、盛大な清め祓いと開眼御霊祭を挙行了た。
- 昔の六か寺に祭られていた6体の仏像の内、1年1体ずつ四年がかりで、大日如来、十一面観世音菩薩、薬師如来、不動明王の4体を刻んで「行満堂（神道の慰霊殿）」に奉安し、法華経と般若心経を読経して霊を慰めた。
- **神社本庁からは、神社に仏像を祭ったと言うので調査に来たが、事情を説明して納得してもらった。・・・」**

神社境内の神殿に仏殿（行満堂）を併設した。まさに、現代版神宮寺（別当寺）の復興・再現であります。**神社本庁の調査におけるその指導的意向に反対し、逆に説得を試みるなどと言うことは、一般の神社関係者の中で他にいるものだろうか。**これもすごいと思う、この内容に接し、感激・感動して心身ともに震える思いがした。なお、別記したが、出羽三山神社の霊祭殿に対応する姿勢にも酷似している。

そこで確かめたく、2014(平成26)年5月16日(金)同神社(三重県鈴鹿市)に参拝に行ってきた。普通の神社だが、広大な境内敷地を持ち、図-16が拝殿、図-17aが行満堂、図-17bがその内部。祀られている仏像は阿弥陀如来を加えて5体になっていた。神像としての聖徳太子像も加え、中央の行満大明神と共に全部で7体が混在して祀られていた。まさに神仏同座の聖域そのものであった。置かれていた儀式の道具を見ると、右端には幣ぬさ、中央には三宝・神境、左端に焼香箱が置かれており、神仏を合せた作りとなっていた。この仏殿(行満堂)に専属の住職がいる訳ではなく神社の直営なのである。つまり神官(神職)が仏事の儀式を以ってお勤めを行っていた、つまり、神官が仏式祭祀を日常的に斎行している、私が行った時に説明をして下さった方は、まさしく装束が神官の姿であった、心底から感激した。この神仏像の7体についてはこの神官から説明を頂戴した。



図-16



図-17a



図-17b

(2) 熊野本宮大社

同社は、全国の「熊野神社」の総本宮である。一宗教法人である。図-18上は入り口鳥居の所である。同図下は、本殿へ向かう参道の途中の様子である。両側に寄進された沢山の昇り旗が並び建てられていた。その旗に記載されているのが「熊野大権現」である。なお、ここには三回行って参拝している。「権現」とは神仏習合の中で生まれた本地垂迹説により、本地を仏・菩薩とした神様への神号である。この参道を歩くと普通の神社なのかと錯覚に襲われる。また、同大社のホームページには次のような言葉が記載されている。

「・・・熊野本宮大社は『神を父に仏を母に・・・』として祀る、祭神・本地仏主祭神は、家都御子大神の本地仏は「阿弥陀如来」とされた。神仏習合を取り入れ、極楽浄土の中心にある仏の阿弥陀如来が本地仏になったことから、熊野の地は浄土を求める人々の聖地となっている。・・・」

本大社は、列記とした神社本庁—— 神宮（伊勢神宮）を本宗とし、日本各地の約8万社の神社を包括する宗教法人、神社神道の宣布を目的の一つとする——の加入団体である。こうでありながら、参道は堂々と往古の神仏習合の名残りである「大権現」で飾り、ホームページ上では今日に於いても「本地仏、神仏習合」の歴史を容認・継承している姿勢の開示です。表向き（建前）は列記とした「神社神道」である。

その裏には、人間の理屈で捏ね回すような小細工では左右出来ない、如何ともし難い「心の奥底に流れる崇仏敬神・神仏同時崇拜の大潮流」から目を背けていない大道がある。むしろその精神と共にあるのが今日の同大社であると言う認識・位置付けではないだろうか。

(3) 御岩神社の取組み

茨城県日立市入四間町にある神社で、境内は図-19のとおり。2019(H31)年3月10日(日)参拝に行ってきた。パンフレットから要点を引き出して見る。

・・・ 古代より信仰の聖地であった。江戸時代に至っては、**山形県は庄内の出羽三山を勧請し、水戸藩の出羽三山として崇敬を集めた**。明治維新によって神仏分離が実行され、神社として純粋な形を保つため、大日堂、観音堂、念仏堂、大仁王門など取払われたが、仏像の現存、境内の遺跡、祭事内容など古代信仰（古神道）、神仏習合色が色濃く残り、「神仏を祀る唯一の社」として、他の神社、寺院に見られない独自の信仰を伝えている。・・・

現地はまさしく「・・・他の神社、寺院に見られない独自の信仰を伝えている。」のとおり、偽りのない状況であった。神様も仏様をも同等にお守りしているという関係者の姿勢が直に伝わってきた。単なる神社ではないので、老若男女たくさんの方が参拝に訪れていた。神仏混交の境内に入ると、バランスが取れているというか格別の落ち着きを感じられる。日本神道の神社を束ねる神社本庁傘下の神社側から積極的に神仏習合を訴求している数少ない神社ではないかと思う、衷心より崇敬のこころを篤く持ちたく思っている、素晴らしい神社であった。



図-18

御岩神社案内図



入山の心得

御岩山は神域です。下記心得を守り敬虔な気持ちで登拝願います。

- ① 登拝ルートへの厳守
- ② 雨天時、積雪での入山禁止
- ③ 午後3時以降の入山禁止
- ④ 登山の装備
- ⑤ 動植物や石の採取禁止
- ⑥ 火気厳禁、ごみ投棄禁止
- ⑦ 食事禁止

光圀公
「園中にはびこる草根刈り絶えて
君が千代田に返し奉らむ」
齊昭公
「光圀の遺せる跡を吾れ訪えば
朝廷を守る証しなりけむ」



(表参道奥宮)
徳川光圀公 大日本史
筆初めの儀

登拝道 — (Red line)
参拝道 — (Grey line)



(参集殿) (拝殿)



(旧御本尊)
県指定文化財



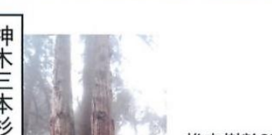
(裏参道奥宮)



市指定文化財
齋神社内



(祖霊回向社)



推定樹齢600年・周囲9m・高さ50m
県指定天然記念物
林野庁「森の巨人たち百選」



阿形像 昨形像

ご注意

山中に御手洗いはありませんので登山前にご利用ください

図-19

(4) 出雲大社紫野教会（京都市北区紫野）の見識

神道界からのキリスト教に対する見方に少し関心があることから、同会ホームページに次のような内容が記載されているので拝借する。(傍点・下線は大沼)

・・・日本人の宗教意識とは、こうしてかくれキリシタンの信仰の特徴を見ていくと、結局のところ「唯一絶対神の元での死後救済の宗教」と言うキリスト教の要素は殆どなくなってしまい、「八百万の神の世界での現世利益と先祖崇拜の宗教」になってしまった、つまり、全くの日本の民俗宗教になってしまったと感じられます。

よく考えると仏教もそうです。仏教も本来は解脱を目標とする個人救済の宗教で、日本に入ってきた時は国家鎮護の宗教でしたが、結局は仏に現世利益を祈り、先祖を供養すると言う宗教になってしまいました。これと全く同じことになったわけです。日本人はあまり宗教を意識していないと言われますが、実は相当強固な宗教意識を持っている民族なのではないか、と感じるのです。

宮崎賢太郎氏の『カクレキリシタンの信仰世界』の中に、殉教者の祠の前で神職の金子氏がかくれキリシタンの人たちと豊作を祈願するお祭りを行っている写真が載っています。また、宮崎氏はこのような話もされています。

「館浦（長崎県）の比売神社の神主金子証氏は大胆にも、『もし良かったらキリストさんを自分のところの神社にお祀りしてあげてもいいですよ』と語った。日本人の宗教感覚を端的に表現しており、カトリックである筆者は一瞬唖然とし、次の瞬間その包容力の大きさにある種の感動を覚えた。」

この話を聞いて、神主の私も面白いとは思いました。ちょっと考えて見ましたが、神道的に間違っているとは思いませんでした。キリストさんは外国の人ですが、八百万の神の中には外国の神もいますし、人間だった神もいます。そもそも村人が信仰している神様なんだから、村人の人々が支えている氏神社にキリストさんを合祀するのは何の問題もありません。そして現世での加護を期待する、と言うのも自然なことでしょう。

熱心なキリスト教徒の人には耐えられないものかもしれませんが、イエス・キリストも聖母マリアも、唯一神デウスも日本にはいると八百万の神々の中に引きずり込まれてしまう、これが神道であり、これが日本人なのだ、と思うのです・・・

それに関連し、私が読んだ「カクレキリシタンの実像」（宮崎賢太郎氏著書）に次のように記載されている。

・・・普通の人には「カクレ（隠れ）キリシタン」と言うと、神道・仏教の信仰を隠れ蓑として、キリシタン信仰だけを守ってきた分けではなく、一般の日本人とどこも変わることなく、ごく普通の仏教徒として、神道の氏子としての務めもはたしてきたのであり、檀家総代や氏子総代まで務めた人も少なくありません。神仏信仰とともに、先祖代々伝わるカクレの神様も併せて拝んできたと言うのが実態なのです。カクレキリシタンは「仏様」と「神様」と「カクレの神様」の三位一体の神を拝んでいると考えたらわかりやすいでしょう・・・

(5) 山本健太さん（神社本庁／神職）のお勧め

同氏のネット「うぶすな教育コミュニティー」サイトの中の「神は、火(か)水(み)の調和の働きなり」と言う処をその儘引用する。

・・・「火」は縦に上がる陽の働きがあり、「水」は横に広がる陰の働きがあります。そして、「火と水」で、火水(かみ)となり、神になります。例えば、父の働きは「火」(陽で縦)で、母の働きは「水」(陰で横)となります。父は子種の火を付け、精神を子に伝え、母は羊水に包んで胎児を大きくし、産後は母乳でわが子を育てます(現代では通用しないかもしれませんが・・・)。子どもが道で転べば、父親は「泣くな!立ち上がれ!」と縦の働きで叱咤激励し、母親は「痛かったね・・・大丈夫?」と、子どもを横にしたまま撫でて癒します。どちらの声かけも痛さが和らぎ、元気になります。子どもの教育にとっては、どちらがいい?というものではなく、その子どもの状況に応じて、両方の働きが必要となります。神道はどちらかといえば、父の陽の働きであり、「元気」が湧き出てきます。仏教は、母の陰の働きで「慈悲、救い」で受け止めて貰い、気が楽になります。とすることで、神社(陽の働き)と寺院(陰の働き)の両方の力を頂ける日本は とても有り難い国であり、神社、寺院の両方を参拝されることをお勧めします。また、火は左(ひだり)を、水は右(みぎ)を示しており、左手の「ひ=火(ひ)=火(か)」と右手の「水(み)」の両手を合せることで、「神(かみ)」と通じる「祈り」の手になります。・・・

神社本庁の神職が、神社のみならず寺院の参拝も推奨しているのである、崇仏敬神の心を大事にしておられる。これまた、真に素晴らしい心である。このように、神職や僧職の方々からは誰でもが唸るような教示を垂れて欲しいと思っうていう。なお、「神=火・水、火・水=神」の捉え方は、古神道の共通イメージのようである。

(end)